

# 令和2年度 学校評価報告書

園名	三輪幼稚園
----	-------

## 1 教育目標

『元気いっぱい みわっ子』

- ・友達と協力できる子どもを育む
- ・やさしく思いやりのある子どもを育む
- ・自分で考えて行動する子どもを育む

(八景中学校区共通目標)  
人も自分も学校(園)もふるさと大切に育む

## 2 今年度の重点目標

「自分たちで遊びを創りだし、遊び込む子をめざして」

～子どもたちの小さな成功体験を支える教師の役割を探る～

## 3 総合的な自己評価

コロナ禍による今までとは違う日常において、園の教育活動を見直し、変わらず大切に継承していくものと、現状及びこれからの見据え、子どもたちの育ちを保障するために変えていくべきものの検討を行った。そして、その視点で一つ一つの活動を見直し、今、できることをできるように実践していく工夫を積み重ねた。

加えて、今年度より3歳児保育が始まり、3年間保育という視点からの保育の組み立ても同時に行っていた。

一貫して大切にしたのは、「子どもたちが主体」という視点である。子どもたち一人一人の興味関心や心の動きを捉え、環境構成や教師の援助を工夫し、子どもたちから動き出す姿を支え続けた。その中で、クラスのみならず、5歳児を中心に縦のつながりから生まれる意欲や期待感を大切に、子ども同士で育ちあう関係性を築き、各年齢の豊かな育ちにつながった。

このような園の考えを保護者に様々な方法で発信し、理解と協力を求め、全面的に支えていただいたことに感謝したい。

残念ながら、今年度は地域との連携に係る取り組みが成しえなかった。状況が改善された後には、地域の協力を得ながら多様な人とのかかわりから育つ力を大切に育んでいきたい。

今後も、園職員が一致協力し、保護者や地域としっかりと連携して、子どもたちのよりよい育ちと教職員の資質向上をめざし、園教育の充実を図っていきたい。

## 4 総合的な学校関係者評価

コロナ禍において、行事の実施自体もままならない中、実施できた行事については、内容をいろいろと工夫しながら、子どもたちのペースに合わせて取り組まれていた。

一つ一つの活動を、子どもたちの思いを大切にしながら、十分に時間を使って子どもたちが考え、話をしながら、満足するまでじっくりと遊んできたことが伝わった。

子どもたちの日常の様子を参観する機会が少なかった中で、2学期末の遊びの体験は、親子でとても楽しいひとときとなった。子どもたちが、友達と一緒に存分にそれぞれの遊びを楽しんできたことがよくわかった。

参観の機会が少ない分、丁寧にクラス通信や園通信等で子どもたちの姿や園の想いが発信されている。情報発信することで、園の考えや子どもたちの育ち等について、保護者の理解を得る努力を今後も続けていきたい。

コロナ禍がいつまで続くのかが見通せない中ではあるが、今できることを工夫し、保育内容の充実を図っていただきたい。

地域の方との交流については、相手への配慮も行いながら、できることから始めたい。

これからも、みわっ子の豊かな成長に向けての園の取り組みを願う。

## 5 評価結果

自己評価		学校関係者評価		
分野・領域	評価項目(取組内容)	評価結果及び分析	改善の方策	学校関係者評価委員会の意見
教育課程	学びに向かう力を豊かに育む保育内容の工夫 ・よく考え、自分で決めて挑戦してみたくなる体験や活動の工夫 ・友達とつながり、伝えあいながら、子どもたちが創り出す活動の工夫 ・互惠性を育む異年齢交流の工夫 ・保護者と協同し、親子がともに楽しめる保育内容の工夫 ・子どもの心に添った保育の創造と教師の自己変革	子どもたちの興味関心や心の動きを探り、「やりたい」という気持ちが持てる環境構成や気持ちの芽生えを支える援助を心がけた。クラスの友達や異年齢の友達からの刺激を受け、心が動き出す仕掛けを工夫し、あこがれや期待感、自覚や使命感などに突き動かされる子どもたちの活動を丁寧に支えることを心がけた。結果、3学年それぞれの発達段階において、子どもたちが主体となった活動を創り出すことができた。3年保育が始まり、はじめての3歳児保育の創造とともに、3学年の異年齢交流に新たな工夫が必要であることがわかり、試行錯誤しながらの取り組みとなった。	子どもたちが、自分で決め、動き出すためには、時間も必要である。一人一人に応じたかかわりが大切であることは言うまでもないが、その一人一人を信じて待つことの難しさを実感した。子どもたちは、自分の目の前の状況の中で様々に心を動かしている。その心の動きを理解するには多様な視点からの見取りが必要である。今後、子どもたちの育ちへの願いを共有し、さらに教職員が一丸となり、それに向かって取り組みをすすめることで、子どもたちの育ちと学びを支えていきたい。	今年度より3年保育となり、一層活気がでたように感じる。子どもたちの興味関心を大切に活動を進めている中で、先生方が一人一人の園児をよく見て、一人一人に応じてかかわっていることが伝わる。学年を超えた縦の関係を豊かに育んでもらっていることは、降園後に子どもたちが異年齢で遊んでいる姿からも感じられる。さらに、小学校以降でも縦の関係がスムーズなことから、幼稚園での経験の成果であると感じている。今後、コロナ禍の状況により、少しずつ制限が緩和され、子どもたちが思いきり活動できる環境になることを願う。
子育て支援	親と子がふれあい、仲間づくりができる交流の工夫 ・親と子が安心して集える場の工夫 ・2歳児3歳児の保育体験の場としての園児との交流の場の工夫	今年度は、園庭開放のみの実施となった。3密回避のため、絵本の読み聞かせも実施できなかった。園庭開放は、お天気に恵まれ、運動遊具を活用したこともあり、毎回多数の園児の参加があった。一方で、コロナ禍の中、情報発信も十分ではなかったこともあり、未就園児の参加が少なかった。	今年度実施できなかった保育時間中の園児と未就園児との交流が実施できる状況になれば、内容の工夫により、それぞれの学年で互惠性のあるかかわりができるよう、年間計画を立てる際に、十分検討し、実のある活動を実施したい。	今年度はコロナ禍の中での取り組みであったので、実施できる範囲での取り組みであったと理解できる。子育てに係る情報については、保護者同士のつながりができ、情報交換ができるようになって、心強く思っている。保護者同士の関係づくりの機会がなかなかもてなかった中で、つながっていったのが有難い。
保護者・地域住民との連携	園やふるさとに愛着をもち、大切にしようとする心の育成 ・PTAや地域の各種団体との参画による体験活動の工夫	子どもたちの園生活の様子を参観したり一緒に活動したりする機会がほとんど作れない状況下ではあったが、秋のウォークラリーや親子昼食、2学期末の遊び体験など、できることを工夫しながらかかわりを楽しむことができた。しかし、地域の方々との活動を計画できず、体験の幅を広げることができなかった。	感染予防対策が図れ、人との交わりの幅を広げられる状況になれば、これまでの活動を基に、活動の工夫を行い、多様な人とのかかわりから得られる、自分は大切にされているという安心感や自己肯定感を大切に育んでいきたい。	地域の方の年齢等も考えると、相互に直接であって交流することは困難だったことは、十分に理解できる。今年度、できることをできるようにという取り組みの工夫の中で、親子昼食やウォークラリーがとても楽しかった。
校園所連携	保幼小中連携の推進と小学校との円滑な接続をめざした取り組みの推進 ・保幼、保幼小、幼小交流の推進 ・異校種の職員の連携交流の工夫 ・中学校区連携推進への参画	小学校の児童との交流は、今年度の状況から実施できなかった。保育園の子どもたちとの交流のみ実施し、人とのかかわりの幅を広げるきっかけづくりができた。三輪小学校区内の保幼小では、校種を超えた担当者の交流を学期ごとに実施し、互いの取り組みの情報交換や接続の視点での取り組みの確認をすることができた。	5歳児が小学校の雰囲気を感じることができている機会が非常に少なく、就学前と小学校の接続という視点で大きな課題を残している。入学後も、小学校と連絡を取り合い、きめ細かな引継ぎを行う必要がある。次年度は、状況が改善された後には、有効な取り組みを行いたい。	昨年度までと同様に子ども同士の交流ができなかったことが、子どもの不安感につながっているように感じる。経験や情報のため込みができていないことを考慮した小学校生活のスタートの取り組みをしていただけることを期待したい。中学校区の共通目標等、幼小中とつながりのある取り組みが行われていることに心強さを感じる。